

国立国語研究所学術情報リポジトリ

趣旨説明：なぜ「研究法」なのか

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-06-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 横山, 詔一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002976

趣旨説明：なぜ「研究法」なのか

横山 詔一

1. 科学界からの指摘

平成 20 年（2008）7 月 7 日付けで科学技術・学術審議会学術分科会から「国語に関する学術研究の推進について」という報告が出ました。本日のテーマに「研究法」という文言をいれたいと強く意識したのは、その報告文書の記述の一部に眼がとまったからでした。報告文書の一部を原文のまま引用してみます。

（1）当面、特に重点を置いて推進する必要のある研究分野

国語に関しては、これまで、書籍や新聞等における書き言葉の収集や話し言葉の聴き取り調査等により、言葉の多様な使用実態の継続的な把握が行われてきた。また、体系的に収集し、研究用の情報を付加した言語資料のデータベースであるコーパスの構築も行われてきた。このような言語資源の収集・整理は、国語に関する学術研究の基盤となるものであり、さらに推進することが必要である。

他方、収集されたこれらの言語資源の分析結果から法則を発見し、それを検証するなどの理論研究は十分に行われておらず、今後、文法や語彙・意味、音声・音韻など幅広い分野にわたって、このような理論研究を推進することが不可欠である。

また、国語がこれまでどのような歴史的変化を遂げてきたか、地域的、社会的にどのような変異があるかについての研究も必要であり、これらの基盤となる資料の収集やデータベースの構築等が求められる。

さらに、我が国の国語の特質と普遍性を明らかにするため、国際的な研究協力を推進しつつ、他の諸言語との対照研究を行うことも重要である。

（2）新たに展開する必要のある研究形態・方法

我が国における国語に関する学術研究は、これまで、個人による研究が主体であるとともに、分野が細分化されたために、個々の研究者や研究分野の研究の視点や手法、成果が共有されにくい状況が見られた。今後は、個々の研究者や研究分野の知見を共有し、既存の成果の検証や新たな法則の発見等を推進することにより、学問体系全体としてさらなる発展を図るため、全国の大学等の研究者による共同研究を推進することが必要である。

このため、国語に関する学術研究論文を含めた学術資料等の収集をさらに進めるとともに、情報技術を活用し、これらの学術情報が簡便に入手できるようにするための基盤整備が必要である。また、全国の研究者に開かれた共同研究の場を作ることも必要である。

また、近年、例えば、情報工学との連携による言語情報処理研究や、認知科学との連携

による言語習得研究など、自然科学分野を含めた関連分野との共同研究の重要性が高まっている。今後、このような新たな学際的研究の発展を視野に入れて共同研究を推進することが重要であり、このため、関連分野の研究者が積極的に参画できるようにするための仕組みの整備が求められる。

これを読んで、きょうの研究発表会の趣旨をなんとなく理解してくださった方もいらっしゃるかと思います。念のため、この報告文書のどこに私の注意が向いたのかを抜き出しておきます。(1)のところで「他方、収集されたこれらの言語資源の分析結果から法則を発見し、それを検証するなどの理論研究は十分に行われておらず、今後、文法や語彙・意味、音声・音韻など幅広い分野にわたって、このような理論研究を推進することが不可欠である。」とあります。続いて(2)では「今後は、～、既存の成果の検証や新たな法則の発見等を推進することにより、～」と記されています。この短い二つの文章は、どう読むべきでしょうか。この問いに対する正解は一つではないし、読み手の立場や経験によっていろいろな解答案が存在すると思います。きょうの研究発表会では、この問いについて頭の片隅で静かに考える時間を皆様と共有できれば幸いですと考えています。

2. 見えないモノを見るために

国立国語研究所は創立以来 60 年間にわたって国語の合理化をめざす科学的な調査研究をおこなってきました。この目的を達成するために先学が立てた大黒柱がいくつかあり、その一つが言語生活研究だといわれています。たしかに、『日本言語地図』や『日本方言文法地図』は日本の方言研究における金字塔です。また、愛知県岡崎市での「敬語と敬語意識に関する調査」や山形県鶴岡市での「地域社会における方言の共通語化」の経年調査は、日本の社会言語学の基礎を築いたばかりでなく、世論調査の手法確立などに役立ち、統計数理研究所(大学共同利用機関法人)の発展にも貢献したようにみえます。国語研の言語生活研究は、話し言葉だけではなく、書き言葉(文字生活)についても着実に研究成果を積み重ねてきました。その功績は高く評価されるべきでしょう。

しかし、国語学・日本語学の世界から一歩外に踏み出すと、方言研究を唯一の例外として、国語研の言語生活研究の成果はほとんど知られていない、あるいは視野に入っていないといっても過言ではない感じがします。民族学、文化人類学、日本文化論、歴史学、民俗学、国文学などの諸分野における精鋭研究者の冷徹な眼に、国語研の言語生活研究はどう映っているのでしょうか。国語研所員の一人として気になるところです。心理学や脳科学の研究者集団と交流していると“国語研の言語生活研究は見えない”という声を聞くこともあります。見えないモノは存在しないのと同じだ、という主張が近いうちに出てくるかもしれません。見えないモノ→存在しないモノ→忘却・風化、という結末にいたる前に、見えないモノを見えるようにする努力が必要ではないかと思えます。

科学一般を見わたすと、見えないモノを見る道具が発明された時に、科学史に残る大き

な進歩がもたらされました。望遠鏡による天体観測、顕微鏡による細菌観察、そして fMRI による脳のはたらきのイメージング（可視化）が登場し、物理学、医学、脳科学が飛躍的に発展したのです。観察・観測機器だけではなく、ニュートンの万有引力理論やアインシュタインの相対性理論などの理論も、見えないモノを見る立派な道具です。文法理論も同じだと考えます。

外の学界からは“見えない（といわれている）国語研”の言語生活研究を、見えるようにするには、どうしたらよいのでしょうか。方策の一つとして考えられるのは、民族学、文化人類学、心理学、脳科学そして複雑系（熱力学）などの研究者集団にも面白がってもらえる「研究法」や理論を開拓することだと考えます。その研究法や理論にもとづくオリジナルな論文が『Nature』誌や『Science』誌などのレベルの学術誌に掲載されるようになれば、その成果は、まったく畑違いの分野の学者にも見えるようになるはずです。今年の『Nature』には言語変化に関する論文がいくつか掲載されました〔たとえば、Lieberman E, Michel JB, Jackson J, Tang T, and Nowak MA. (2007) Quantifying the evolutionary dynamics of language. *Nature*. 2007 Oct 11;449(7163):713-716.など。論文はネット上で無償公開されています。米国国立医学図書館等による文献検索データベース“PubMed”をご参照ください〕。また、古くは『Science』1942年10月号に Zipf の法則で有名な Zipf 博士の論文が掲載されています。

言うまでもなく、世界的な一流学術誌は研究成果を広く見てもらうための強力な道具です。研究戦略を練るうえで、①斬新な研究法や理論の開拓→②論文を世界的一流誌に投稿、という流れをいまの時点ではっきりと意識しておくことは無駄ではないと思います。その中に“ある種の必要悪”が含まれているとしても、冷徹な思考にもとづいて、それを呑み込む覚悟を持つべきでしょう。

喜ばしいことに2008年のノーベル物理学賞は日本語母語話者3名が独占しました。受賞者の専門は素粒子の理論研究で、後年になって実験で証明された結果を紙と鉛筆を用いて数十年も先に予測していたのです。見えないモノを見るための研究法や理論を編み出す努力が、日本の物理学を世界のトップクラスに引き上げ、それが結果的にノーベル賞という世間に見える福音の形で環流されたと考えてよいでしょう。受賞者の一人である小林誠博士は高エネルギー加速器研究機構（大学共同利用機関法人）の名誉教授であり、高エネルギー加速器研究機構は素粒子に関する理論的予測の妥当性を実験で検証するための国家機関です。物理学の発展は理論家と実験家が相互に刺激しあうことによって支えられています。国語研の言語生活研究も、リスクを承知のうえで、物理学の先達が歩いたのと同じ道をたどってみる価値はあるように思えます。

3. 創立60周年の公開研究発表会として

きょうのテーマ「言語生活の研究法」には、ひそかな意図を込めました。すなわち、言語生活に関心を寄せる研究者が、言語生活の中の“見えないモノを見るための道具”を自

分自身の手で作り上げるために、今後どうすべきかを考える第一歩を踏み出す契機にしたいということです。

このあとにおこなわれる発表は、文字生活研究と方言研究の2本立てになっています。発表者の高田と三井には「言語生活グループという組織内でなされたプロジェクトを中心に、これまでに得られた成果を紹介するように」と依頼しました。しかし、きょうのテーマに込めた“ひそかな意図”については、発表原稿締め切り直前まで誰にも話しませんでした。それを事前に説明する必要はない、と判断したのです。なぜなら、先にも申したように、きょうの研究発表会の趣旨は、これからの言語生活研究について頭の片隅で静かに考える時間を皆様と共有することにあるからです。きょうの時点で、高田と三井が“見えないモノを見るための道具”について明示的に語ることはないと予想しますが、将来に向けた寓意や暗示はあるはずで。また、一見つながりのない文字研究と方言研究の間に、見えない糸がつながっているのか、いないのか、という観点で考えてみるのも面白いのではないかと思います。皆様ご自身の心の眼で、それを見てくだされば、この会の企画担当者の一人として、うれしく思います。